
ガンダム00の世界に転生!

御餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダム00の世界に転生！

【Nコード】

N7334N

【作者名】

御餅

【あらすじ】

オリ主転生物です。厳しい内容なのでご注意を。原作のキャラは一切出ません。

転生（前書き）

初投稿物です。チートオリ主転生物が大好きな人は見ない事をお勧めします。

気分を害されても私は一切の責任を負いません。

転生

あ、俺は……死んだのか。

漠然とそう思った俺は、真っ白い空間に横になっているのに気付いた。

確か記憶では、夜になんか買い物に行こうかと近くのコンビニに行こうとしていたんだっけ。

そしてその途中、横から光を感じて、振り向いたときに——そこで俺の記憶が止まっている。

なんつつか、人って案外あっけなく死ぬんだなあ。

しかしこの空間は見渡す限り真っ白だ。何だここは。

「やつと起きたようだな」

突然声がしたのでビクツとして後ろを振り向いた。

するとそこには見たことのない女性が立っていた。……うん、すっ

げえ美人だ。

「あんた誰？つかここどこ？」

「教えてやろう。私はお前達の言うところの神だ」

「は？」

いやいや何言っただこいつ。あれ？もしかして。チガイ？

何俺、死んでまでなんか夢でも見てんの？

「お前の認識なんかどうでもいいさ。ここは私の住む場所。お前などが入ってきていい場所ではない」

まあいいか。俺もう死んでるし。細かい事は知らん。

「あのー、俺ってもう死んでるはずじゃね？何でこんなところに居んのさ」

「私が手違いで死なせてしまったからだ」

はあ？

「いや、手違いも何も、あんなの只の偶然だろ。もしくは事故だ」
「うるさい。お前の運命を捻じ曲げてしまったのだ。こんなことは神になって以来の失態だ……！」
「あつそう」

なんかプライド高そうな人だな。あ、神か。

「ともかく、何億年も生きてる私がこんな些細なミスを犯すのが我慢ならないんだ」

「で？どうすんの？」

「お前を蘇らせる」

「何い！？」

何でもありだな神様。さすが。

「しかもある程度調整する。今のまま生き返しても肉体が死んでいくからな。そのまま死んでしまう」

「つまりあれか、転生って奴か……！」

「……まあ、そうなるかな」

神が勢いづいた俺に少し引いているが、この際気にしない。

おいおい、俺の大好きな転生物って奴じゃないか！しかも神様の力のお墨付き！

「俺の要望に、応えてくれるんだろ！」

「……まあ、今回悪かったのはこちらだからな、多少の便宜は図ってやろう」

やつほう！神様直伝の許しが来た！そういや最近あったあのアニメの世界に転生するってのはどうよ！

しかも俺無双で原作レイプしてやんよ！

「とりあえず、言ってみる。話はそれからだ」

「じゃあ言うぜ！

転生先はガンダム00の世界！

俺の設定は純粹種イノベーター！あ、それとニュータイプの力と種割れも欲しい！

容姿はコーディネーター並の美形レベル！

俺の専用機はダブルオーライザー！」

「お前の要望はわかった。すぐに送ってやる。……たしか00の世界だったな」

「おうよ！」

白い空間の中に光が広がってきた。それが俺を包み込んで、あっさり呑み込んだ。

「……まあ、存分に楽しんで来い」

神様がそんなことを言ったような気がしたが、俺は余り気にしなかった。

転生（後書き）

まあテンプレ通りかな。ここまでは。

屈辱（前書き）

結構ノリノリで書いた気がする。

屈辱

「この屑！！さつさと立ちやがれ！！まだノルマは終わっていないぞ！！」

「は、はいいいい……」

「声が小さい！もっと張り上げる！」

「はい！」

俺はひたすらグラウンドを走り回っている。

何でこんなことになっているかと言うと、説明は最初の頃に戻る。

転生した時、この世界はたしかのガンダム00の世界の西暦だった。しかし、それだけだった。

俺は純粹種イノベーターになれてない。身体能力でそれがわかる。

元の俺と何も変わっていない。

俺はコーデイナーレベルの美形じゃない。顔を見てそれがわかる。元の俺と何も変わっていない。

俺は専用機など持っていない。あつたとしてもどこにあるかわからないし、それ以前にない。俺が知らないからだ。

つまり簡単に要約すると、元の俺のスペックでこの世界に放り込まれたわけなのだった。

元の俺はどこにでもいるオタクだ。特に運動しているわけでもなければ、何かの特技があるわけでもない。

そんな俺が、何故か軍隊の養成学校にいるわけだ。

なんでこんなところにいるかと言うと、神様の置手紙にこう記されていた。

先に言っておくが、これだけが俺と神様の繋がりであり、それ以降は一度も会ってない。

おっと、置き手紙はこうだった。

『お前を一般人では最も原作に介入しやすい場所に転移した。設定

もお前が違和感なく暮らせるようにしておいた』

因みにここの勢力はユニオン。あのハムとかがいた場所。まあそんなことは、今の俺には考えてる暇もない。

「お前はここ始まって以来のクズ野郎だ！声も出ない！体力も筋力も知識もない！まさにウジ虫以下だ！恥を知れ！」

「す、すいませええ……」ゼエゼエ

「謝っている暇があつたらさっさと走らんかあ！」

「はひい……！」

すごい怖い顔をした教官が、俺に怒鳴りながら罵倒する。俺は心の中で罵りまくりながら、しかしビビって走り続ける。

他の連中は既に全員ノルマを達成している。他の奴は俺よりも倍以上速く切り上げて終わっている。

俺だけがグラウンドを走り回っているのだ。その姿はハッキリ言っただけが虚しい。

ふうふう言いながら走っていた俺は、遂にその場で倒れた。

「貴様、誰が休んでいいと言った」

上から教官の声が降ってくる。

「も、もう走れません……休ませて下さいよう……」

「ほう、貴様はいつの間に動けなくなるほどまでに走り続けたという事か」

嘲笑うような教官の声。反論する声も上がらない。

「因みに今の貴様が走った距離は僅か10キロぐらいだな。他の連中が走り切った距離はたったの30キロだ」

「さ……！？」

「つまり、貴様は他の連中の半分以下の距離で倒れているわけだ。更に言うなら他の連中に途中で休んだ者はいない」

30キロ！？つまりこれの三倍走らないといけないのかよ！
冗談じゃねえ！

「これ以上走れま——」バシン！

俺が反論しようとした瞬間、教官が持っていた木刀で俺を殴った。
すごい痛い。感じたことのないほどの激痛だった。

「ぐううう」

「つまりお前は、まだ後これの倍以上走らなければならないのだ。
こんなところでへばっている場合か！」

「いってえ……」

「反論している暇があればあさっさと立ちあがって走れ。まさか走るだけがノルマと思っているのではないだろう」

「は！？」

今、何か信じ難い事を言ったぞこいつ。

「終わったら筋トレだ。それが終わったら倉庫の掃除、そして飯だ。
まだ教練が始まってすらいないし、武器の扱いからその実習、
パイロットのGの訓練もしなければならぬ」

他にもやることが山のようにある。他の者は既に飯に入っている」
「そ、そんなあ……」

なんだよ、ここは地獄かよお……

「とにかく貴様はさつさと走り終わることが先決だ。兵隊なら体力は当たり前にあるべきだからな。」

……さつさと走れ！もたもたするな！」

俺は兵隊を志した事なんて一度もない。そんな言葉は出てこない。木刀の怖さが身に染みついているからだ。

俺が走り終えたのは既に昼頃だった。

教練が始まってから教官がいなくなり、たびたび止まりながら、完走し切った。自分でも褒めたかったほどだ。

しかし宿舎に戻った途端、自分は相手をされなかった。

相手の立場から言えば、自分は落ちこぼれ以外の何物でもない。

しかし、虐めの様なものはなかった。いや、それどころか誰も自分の相手をしようとすらしなかった。

なんとなくわかる相手の思考、即ち「あいつの近くには行きたくない」というものだ。

後でわかった事だが、自分の能力のなさに自分だけはぶられたのだ。ここでは、まず5、6人くらいのチームを作って教練に励むものなのだ。

しかし、さつきも言った通り、自分だけ「落ちこぼれ」の称号を手にすることになった。どこのチームにも入れてもらってない。

近寄りたくないというのは、変に慣れ合えばこいつがうちのチームに来るかもしれない、という心の現れでもあった。

朝飯は食べられなかった。昼飯は必死で胃の中に詰め込んだ。食欲がなかったが、食べないと持たない。

その後の座学はというと、一言で言うなら、厳しすぎる。

全く予備知識なしで専門的な事を教えてくるから俺が受けてきた学校の授業よりも遥かに眠くなった。

ていつか、寝た。

すると教官が持っていた竹刀で俺を殴りつけ、上半身裸でグラウン

ド50周を命じられた。……本当に冗談じゃねえ。

それでもやつぱり怖いから走り続けた。キツイ、足がもうパンパンだ。終わった頃には、既に日も落ちて、座学、教練も終わっていた。晩飯を食って、シャワーを浴びて、自分の寢床に飛び込んだ。

最悪だ。アニメも見れない、自分用のPCもない、漫画すらない、ネットできない、このままじゃ禁断症状でるぞおい。

ここにはパソコンもあるが、私用で使う事を禁じている。よってネットもできない。

来季のアニメも確認していないし、今度出るけいおんのゲームも買わなきゃいかんのに。

やべえ、ブログの更新まだじゃん。

有り得ねえ。純粹種イノベーターになってダブルオーライザーで夢想して原作レイプするはずだったのに。

しかも超美形になって俺のハーレム気付いてやりたい放題してやろうとしたのに、話が違っちゃねえか。

なんでこんなくそきついことやってんだよ。こんなだったら元の世界に帰りてえよ。

CBは？俺の嫁のフェルトちゃんは？俺のガンダムは？どこよ。まあいい、とにかく今日は調子が悪かった。明日から本気出す。

「つかさ、なんであんな落ちこぼれがこんなところにいるわけ？」

そんな声が聞こえた。勿論俺は反応しない。

「わかんね。つかよく軍人になろうとしたよなあれで」

「あいつ何もしてないのになんかフウフウ言ってる、目がすごいギョロギョロしてんだよ。何かに警戒してるかのようにな。」

それに、人と目を合わせないんだよ。合わせたら合わせたで、ビクツと震えて目を逸らして顔を逸らすんだよ」

「なんか身体が常に濡れてんじゃないかねえのかってくらいに湿ってるよ

な。触ったら何か付きそうだな」

「声もなんかボソボソしてて籠り過ぎていてさ、何言ってるのかわかんねえって」

「俺の知り合いにあいつくらいのスペックの奴いんだよなあ。確か……えと、なんてったけ」

「知ってるぜ、オタクって奴だろ」

「そうそれ。なんかキモくてさ、何もしてないのにフウフウいってさ、いつつも汗かいて体臭もきつくてよ」

「わかるわかる、二次元のキャラを俺の嫁ーみたいな？クソキモいよな」

「友達もいなくてよ、学校でもさっさと帰りやがって寂しい奴だった」

「だったらお前がダチにでもなつてやれよ」

「いやに決まってるんだろ？しかもそいつ、働かずに家に閉じこもってるんだぜ？夜になったら出てくるらしいし」

「キメエ！夜行性かよ！どんな生活をしてんだよ！」

「俺の今大学にいる友人がさ、非公式でそいつの事をまとめた論文を作ったんだよ。見たらさ、出だしからこうだぜ、

『僕が起きたのはいつも通り午後四時くらいのことだ』」

「すげえ！いきなり生活リズムがおかしいし！そんな奴本当に現実にいるんだ！」

「起きている時間は自分の部屋でPCかエロゲとかで、買い物もネットでフィギュアとか買い放題。夜になったら食料調達。

誰にも会わないように、真夜中にな。昼間は家の中でブルブル震えているんだとか」

「なんで？」

「何でも人に会うのが怖いとか。呼び鈴や電話の音で跳び上がるとか。外から人の声が聞こえるだけで縮み上がるとか言ってた」

「ちょ、麻薬中毒者かよおい！そりゃ近寄りたくねえよ！」

「しかも一番最悪なところは、自分は働かずに親の脛を齧り続けて

るってとこだ。可愛そすぎだろその親」

「ひでえ！ただのごく潰しじゃねえかよ！まさに社会のゴミだな！
いるだけで実害が出る辺り救いようがねえ！

さっさと家から追い出せって！ゴキブリよりも先に抹殺すべきだ
ろ！」

「決め台詞もあつたぜ。『働いたら負けかと思ってる』」

「ニートの鏡かよ！なにに負けるんだよ！寧ろ死んだ方が社会の為
になるぜ！」

「んでさ、俺の友人がそいつに『お前何したいの？』って聞いたら
さ、『どっかの作品の世界に転生したい』ってよ」

「ひくわゝ、その世界もそんな奴転生とかしてほしくないだろ。只
の迷惑じゃねえか」

「あれだろ？その後現実つまんねえとか言ってるんだろ？」

「おつよくわかったな。今度大学の友人に論文のコピー取ってくれ
って言つとこーか？」

「見てえ見てえ！」

以前の俺そのものだった。そうか、世間ではこんな目で見られてい
たのか。

俺は何も反論することなく黙って寝床にくるまった。

「でもよ、俺、あいつの存在に結構救われてるんだぜ？」

ビクッと俺は反応した。

「なんで？」

「俺さあ、ここで中の下くらいの成績じゃん。正直少し自身が無く
なってきたさ、どうしようかと思っただよ。

でもさ、あいつがいるおかげで自分がまだましに思えてくるんだ
よ。おかげでこれからも頑張れるような気さえするよ。

かなり救われてるよ俺」

「俺も俺も！たぶんこれ以上ないくらいの反面教師だろあいつ！あいつは存在だけで恐ろしいわ」。

『怠けていたらすぐにあいつのようになる』って！」

「それ悪夢だな！俺だったらあいつみたいになったら俺絶対自殺してるって！」

「あいつさ、体力もない、筋力もない、知識もない、技術もない、根性もない、社交性もない、更に努力もしない、最悪だよな」

「軍人以前に、人としてどうよそれ。どうやって生きて行くつもりなんだ？」

「だってあいつ、座学ずっと寝てるじゃん。他に寝てるやつとか一人もいねえのに」

「当たり前だろ。ついていけねえもん。つかあいつ、ここにきて走ってるだけじゃね？」

「俺が教官ならここから叩き出すね。ここの教官まじ優しすぎ」

「まああいつに矛先が向いてるから俺等が楽な思いさせてもらってるけどな」

「叩き出したら一人で生きていけるかわかんねえけどな。ま、ここには何の関係もないが」

「案外そこらで野たれ死すんじゃない？」

「『今日は調子が悪かったんだ。明日から本気出すキリッ』とか」

「それっぽいな！本気ってなんだよ！あんのかって！」

そこで笑い声が響いた。うるさい。俺はもう寝たいんだ。しかし彼らに注意するのが怖い。

それからというと、普通なら二、三年で出られる養成学校だが、俺はその倍以上の時間をかけてもここを出れない。

後輩にあっさり抜かれたときの屈辱は言葉で表せるものではない。

「つかあの先輩なんでここいんだよ」

「しらね、成績不振じゃねーの？あの人ダメダメだし」

「あんなの軍人にいらねえだろ。ていうか寧ろ社会にいらねえってか」

「正直近寄りたくもないんだよな。キモいし」

これを聞いた時、カツとなって思わずそいつに殴りかかった。

結果、あっさりかわされ、俺はボディブローを食らってその場に崩れ落ちた。

「せんぱゝい、喧嘩する相手は自分で見極めないといけませんよ？」

「ていうか、自分の技量を先に見極めるべきだろおい」

「おい、あんな関わんなよ。こんなのとの揉め事で目えつけられるなんて冗談じゃねえし、つかこいつキメエし」

「後ろが本音だろ」

「モチよ。さつさと行こうぜ」

「おいおい、この人が自殺したりしたらどうすんだよ」

「大丈夫だろ。こいつの自由だし、何よりこいつにそんな根性ないだろ」

そいつらはその場から去った。後では無様に転がっている自分だけだった。

因みにそいつらは今年度から入った新人で、既に養成学校にいた俺よりも遥かに肉体も精神も強かった。

俺は脳内でそいつらを百回以上殺した。実際にやったって振り返ちにされるのが目に見えているから実行はしなかった。

今日の件のあいつらが近くで駄弁っていた。

「おいおい、あの先輩が刃物とかで襲ってきたりしたらどうすんだ

よ。あれは相当自尊心傷つけられたと思うぜ？」

「ないない。ここで武器の持ち込み禁止だし、訓練中だってあいつの腕知ってんだろ？」

「それ以前に負ける気が全くしないけどな。あの先輩の事だから、妄想の中で殺しまくってんだろ」

「ありそうだなそれ！夢の中の俺チート過ぎとか俺ハーレムとか言ってはしゃいでんじゃね？」

「サムい！それサムすぎる！思わずサムイボたったわ！女なら絶対近寄らないから！豚の方がまだましだから！」

「ひでえ！でも的確なところが反論できねえ！豚は可愛いだけまだましだな！」

「でもあいつはさっさと切るべきだろ。俺が教官ならなら問答無用で追い出すね」

「切るじゃなくて追い出すかよ！」

そこで笑い声が響いた。うるさい。俺はもう寝たいんだ。しかし彼らに注意するのが怖い。

あいつ等はこちらから関わらなければ何もしてこない。それが唯一の救いだった。

俺が最低の成績を叩き出し続けてもここにいられるのは、神様の便宜のおかげだ。他に頼るところもないし。

ここにいる奴で俺の事を軽蔑していない奴は誰一人いない。皆俺を見る目が明らかに舐めている。

多少は女もいたが、皆例外なく近寄ろうとすらない。あらかさまに嫌そうな顔で避けるのだ。

ある日、MSのシュミレーターの訓練の日だった。こんな会話を聞いたのだ。

「いやあああああ！どうしよう私、あいつの担当になっちゃっ

た！もう死ぬかもしれない！」

「教官に言ったら？私のとこのメンバー替えてくださいって」

「もうとつくに言ったわよ！でも却下された！もう最悪！通信機からあいつの声が聞こえるだけで耳が腐るって！ブヒブヒって！」

「まあ、あいつならすぐに撃墜されるからすぐ終わるわよ。そこは救いじゃない？」

「……確かにそこのおかげで耳が腐り落ちることはないかも」

「だってあいつ、成績最底辺でさ、最低記録更新中だし」

「絶対抜かれることないよね。ていうか抜きたくないし」

「あゝあ、オペレーター夢見て頑張ってきたのに、挫けそうだね。全部あのクズのせいよ」

三次元の女なんてだめだ。二次元はいい。俺を裏切らないからな。

この養成学校で、俺の評判は全く変わらなかった。ここ始まって以来のクズ、それが俺の評判だった。

俺の最初の同期だった奴はもうここにはいない。俺より後から入ってきた奴も俺を抜いて俺より先にここを出て行った。

俺は時点で、既に三十路越えていた。普通は二十代前半で出られるらしい。

当たり前の話だが、ここには俺の親族も知り合いもない。頼れる人なんていない。

あんなに嫌な思いをしても養成学校を出て行かなかったのは、そこにしかいる場所がなかったからだ。

神様が唯一便宜を図ってくれた居場所なので、離れるわけにはいかなかった。

資格もなく大学も出ていない。ここを出て行ったら働くこともできずホームレスまっしぐらだ。

アニメも見れない、漫画も見れない、フィギュアも集められない、ネットもできない、まさにここは地獄だ。

他の連中がアニメやゲームの話題をしているけど、怖いから近寄れない。

そんな俺は軽蔑の視線に刺されながら屈辱の毎日を送っていた。

俺のそんな屈辱の毎日が、終わりを告げた。

ある日、突然C Bの声明が発表された。これはあのイオリアの声か！俺は跳び起き、そのニュースを聞き、やっと原作が始まるのかと喜んだ。

しかし、俺の毎日が変わるわけではない。あちこちでガンダムが戦闘介入している、それだけだ。

それどころか、色んな奴がC Bのやり方に不満を感じた。俺はとくになんとも思わなかった。

終わりを告げたのは、あいつらだった。

「おい、空にいるあの機体はなんだ？ユニオンのフラッグじゃないよなあれ」

「お、おい……あの粒子……もしかしてガンダムじゃないのか！？」

そんな声がしたので、空を見上げた俺は、空に赤いMSが三機いることに気付いた。そいつらに見覚えがあった。

あれ確か、鳥兄弟のスローネじゃなかったっけ？

この養成学校は、ユニオンの基地と殆ど直結している。ここで色んな機体に触れられるのはそのおかげだ。

最も、俺は本当に『触れた』事しかないわけだが。普通なら整備など、成績の良い奴は操縦もさせてもらえるらしい。

だが今はそんなことはどうでもいい。確かあいつ等……ん？ここは基地の近く、あいつ等がこれからやる事ことは……

思い立ってすぐ俺は逃げ出した。ここにいたら殺される。

スローネアインとスローネドライがドッキングし、GNメガランチ

ヤーを基地に向けて放った。

その火力は凄まじく、一瞬で養成学校の建築物を粉碎していった。凄まじい悲鳴や断末魔や崩壊音が響く。俺は転んだ。——あれ、何で立てない？俺の足はどこに行った？

良く見たら下半身が半分くらい吹き飛ばされてた。それを確認した途端、俺の意識が真っ黒になった。

——何だよこれ。転生したのって他人からは見下され続けた挙句、こんなにもあっけなく死ぬためだって言うのかよ。

ふざけんじゃねえ。俺は、俺は——

俺の意識が完全に消滅した。

後の事だが、基地のフラッグが全機出撃して全機撃墜された。俺をバカにしていた奴らは殆どが死んだ。

それを知ったところで、一緒に死んだ俺は惨めなただけだが。

屈辱（後書き）

正直途中から面倒になった感が否めないです。

因みにガンダム00の世界を選んだのは、一般人を殺しやすかった
咲く人の中で新しくて知名度も高かったからです。リアル物はい
ね。

現実（前書き）

最終話です。ここまで読んでくれた人本当にすげえ。

現実

「目を覚ましたか？」

久しぶりに聞いた気がする声。確か――

「おい、いつまで寝ている気だ。さっさと起きろクズが」

蹴り飛ばされた。その痛みに俺の意識が一気に覚醒する。

あれ？俺って確か死んだはず……何だこの白い空間は……てなんかデジャヴ……

「ここがどこだかお前は知ってるだろ？」

「お、お前は神！」

「やっと気付いたか」

相変わらずすごい美人だな……てそうじゃねえ！

「良くも俺をあんな目にあわせたな！この野郎！」

「あんな目？お前の思い通りの要望を聞いたまでだぞ！」

「ふざけんな！チートな能力くれつつたじゃねえか！」

そう叫んだ俺は視界がひっくり返った。神様が俺の事を本気でぶん殴ったからだ。

そのまま無様に倒れる俺を神は虫でも見るかのように見下す。

「私が叶えてやったのは『ガンダム00の世界に飛ばしてくれ』だけだ。一応原作に関わりやすそうな立ち位置にしてやったのだ。後はお前の頑張り次第じゃないのか？」

「純粹種イノベーターの能力は！？コーディネイター並の美形は！
？俺のガンダムのダブルオーライザーは！？」

「……おい、何だその口は？」

また神様に殴られる。一発一発がすごい重い。

「聞け、私はあえてお前のスペックを全く変えずにあの世界に放り込んだ。さっき言ったチートな能力を手にいれる器が、

本当にお前にあるのか？私はあの世界でお前の姿を見せてもらった。未だにそんな口が叩けるお前は救いようがないよ。

人と歩み寄る努力を全くしない、自分を磨く努力を全くしない、いつも妄想の中で元気で、現実では丸くなって震えている。

お前はあの世界の主人公、刹那・F・セイエイの何億分の一の努力をした？苦痛を味わった？葛藤をした？」

俺は黙る。反論のしようがない。情けないことこの上ないな。

「お前はスペックでもかなり悲惨だというのに、少しでも良くしようという試みが全くない。

もし人間の雌なら、視界にもうつしたくないほどお前は醜い。…

…そうだ、いい物を見せてやろう」

神様が白い手で空間を撫でた。するとそこに何かの映像が映った。

「本来のお前にいた世界だ。時間的に言うなら、お前が死んだ後の世界だ」

そういえば俺死んだからこんなことになったんだった。その事をすっかり忘れていた。

しばらくして映ったのは、俺の両親だった。

『そうねえ……死んだら死んだで悲しいけど、正直に言って今居られても嬉しくないって感じよねえ……』

あの子、何年も前から人づきあいもせず働かずに、ずっと家で籠っていてパソコンだのフィギュアだの……』

『俺は寧ろ良かったと思ってているがな。さつさとこの家から叩き出してしまっておけばよかったと思っているくらいだ。』

あのバカ、いつまで俺達の脛を齧り続ける気かって何度も怒鳴ったのに、知らんふりしやがって。

あの寄生虫がいないと思うと寧ろせいせいするぞ、俺は』

『……そんな言い方ないでしょう？ 仮にも我が子ですよ？』

『じゃあお前はどっ思っている？ あいつは高卒で大学にも行かず、資格も何もない、歳も相当だ。』

これから就職できるかどうかはかなり厳しい。その上あいつには働く気どころか外に出る気すらない。

そんな奴なんで食わせて行かなきゃならん？ 俺達が汗水垂らして稼いで手に入れた年金を、

なんで寄生虫を養う為に捨てなきゃいかんだ？ あいつは社会のクズだぞ？ 働かないで飯だけは一人前に食う奴だぞ？

そんな奴にずっと家にいていいとでも言つつもりか？ お前は』

『……』

『ほら、何も反論できないだろう。お前も俺と同意見というわけだ。普通そうだから落ち込む必要もない。』

そもそもお前に『ババア、ゲーム買ってくるから小遣い寄越せ』なんてあの歳で言う奴なんだぞ？』

『どこで育て間違えたのかしら……』

『間違いも何もない。あいつが自分の足で出て行く勇気を自分で作らなかったのが悪いんだからな。』

自運が悪いと思わず、周りの環境のせいにし続けているあいつに、何をやって無意味だったんだよ』

『あの子の部屋にある物はどうします？ともすぐに処分できる量じゃありませんよ？』

『売れるものは売り飛ばす、それ以外は燃えるごみに全部出すさ。あのバカに使った金を少しでも回収しないといかん。』

『そうでもないと浮かばれない』

『わかりました……』

俺の両親の言葉に俺は耳を塞ぎたい気持ちになった。

両親は自分の子供が死んだというのに全然悲しんでいない。寧ろどこか解放感すら漂うほどだ。

「まあ、当然の事ではあるな。これが極当たり前の反応だ」

神様が口を出した。

「お前みたい理を産まず害のみをまき散らす奴を養ってくれる奴なんていやしない。親ですらごめんだろうな。」

私があの子の親の立場なら警察の手を借りてもお前を追いつけな」
「……」

俺は黙る。映像が別の所に変わる。

もう十年もあってない義務教育時代の頃の同級生達だ。

『そんな奴いたっけ？』

『ほら、中学校の頃いただろ』

『いたような気がするな。悪い、良く思い出せない。で、そいつがどうしたんだ？』

『交通事故で死んだとか、何週間か前だがな』

『マジかよ。知らなかった』

『俺もさっき知ったばかりだけど、真夜中に道路に飛び出したとか』

『ふ〜ん……それより今夜合コンに行かねえか？男の頭数が一人足りねえんだよ』

『はあ？俺もう彼女いること知ってんだろ？彼女持ちオツケーかよ』

『いいからいいから。いてくれるだけでいいんだよ』

『ま、出るくらいならいいが』

その二人の姿に俺は目を逸らしたい気分になった。

「まあ、努力しないお前と努力している連中の姿の違いかな」

またも神様は言った。

「普通に社会に生きて、真面目に努力している連中と、何の努力もしていないお前、比べるまでもないな」

「……」

「さっきからずっと黙っているが、何とか言ったらどうだ？」

神様が急に俺の方を向いた。

「……あんたは神のくせになんでこんな奴の相手をしているんだよ」

「随分と自虐的な物言いになったな。偶然とはいえ、何かの縁だからな。最近は退屈だったから、ちよつとした暇潰しだよ」

一旦間を置き、神様がまた喋り出した。

「私はここから様々な生物をここから見ている。現実には生きている奴はどいつもこいつもちゃんと努力しているんだ。」

どっかのバカのように、他人からチートな力だのなんだのを求めているんだよ。自分の足で立って歩こうとしている。

人も他の動物も変わらない。皆現実と向き合って生きるのに必死

なんだよ。——まあ、お前には関係のない事もな」

「……最初に便宜を図ってくれるって言ったのはあんたじゃないか」
「何から何までやってやるとは言っていないぞ。そもそも努力も何もなしにお零れをもらおうとしているお前の根性が

腐っているという事がわかっただけに、ますますそういう能力を与えるものかと思っただくらいだな」

「……俺だって、あんな能力があれば頑張れるはずなんだよ！」

神様が回し蹴りをかました。俺の身体がみつともなく吹っ飛ぶ。

「ないから、頑張れないというのか？元々持っていないのに？甘ったれるなよクズが。」

普通持っていないのが当たり前なんだよ。今さっきの奴らだってそんな能力の片鱗すら持っていないというのに」

「……ウツゴホッ」

「お前のスペックをハッキリ言ってる。お前は自分で働かず親の金を吸い取るだけの寄生虫で、友達がいない上に、

女からは近寄ってこないくらいキモくて、そのくせ人と仲良くする努力すら放棄した怠けもので、

プライドだけは無駄に高く、なのに自分を磨き上げる努力さえせず、妄想の中では元気な寒い野郎だ。

——まあ、人間社会において存在自体無意味だな。……何か反論できる事はあるか？

あるならば、そこに私を納得できる説明も付け加えて反論してみろ。お前の大好きな妄想はやめろよ、気持ち悪いから」

何にも言えない。神様の言っている事は正しい。それでも客観的であるからこれでも偏見はないほうだろう。

「……………死んだ方がマシってのかよ」

「ふん、まあ論理的に言えばそうなるな」

神様はバツサリ言った。

ガンダム00の世界に転生して酷い目にあっただと思っていた。しかし、神様はそれが当たり前前の評価と言った。

同期からは蔑視され、後輩からは露骨に見下され、女からは露骨に気味悪がられ、教官からは怒鳴られてばかり。

死に方も一般人Aと同じくらい。戦死ですらなく、突然の襲撃でコロリと死んだだけ。

元の世界からは両親からは死を悲しんでもらえず、それどころか良かったと言われる始末。

元同級生は現実を普通に生きて暮らしている。俺の事は知らない。知る必要もないだろう。

そして、神様からのトドメの言葉。崩れかかった俺の心とプライドを微塵も容赦なく踏み砕いた。

……惨めになるな。

「私がお前の立場なら、自殺してるな。もしくは発狂しているかだ。だって生きている価値が全くない、寧ろマイナスだ」

「……うるせえ」

「そこで本題だが」

神様が突然話題を変えた。

「この空間に二度来た時点で察しがついてるのかもしれないが、お前を再び生き返らしてやる」

「……は？」

いや待て、今度は何だよ。

「最初、お前が余りにもふざけたことをぬかしたから、今の自分の身を弁えさせる形で転生させたわけだ」

「……」

「わかっているだろうが一応言うぞ。元の世界以外はお前に身寄りはない。立ち位置の設定だけはしてやる。ありがたく思え。」

次はどうする？どこの世界に転生する？ああ、因みにお前のスペックは一切変えないから。基本的に一般人Aだ」

「……もういい」

「何？」

俺は力なくそう言った。神様は俺を見る。

「生きている価値がないなら、死んだ方がいい。その方が楽だし、誰にも迷惑かけないしな」

「……本気で……言ってるようだな」

「ここまで言われて生にしがみつく奴いねえよ。運命捻じ曲げた事を悪く思うことなく死なせてくれればよかったんだ」

「だめだ」

神様はまた俺を蹴飛ばした。

「死んで楽になるならさっさと自殺でも何でもすればいい。だが、私にお前のような汚い魂をつけることは許さない。」

素手でゴキブリを潰すよりも気持ち悪い行為だよ。私の手を下させるなクズ。

更に言うなら、お前に自殺する勇氣などないからな、どんな転生先でも屈辱に塗れて死んだように生きて行くだけだ。

死んだ方が楽だと思えるくらいにな。だが、さっきも言った通りお前は自殺しない、いやできない。

よかったな。トリニティがお前を殺してくれて」

「……なんだよそれ」

「あの世界にとってトリニティは患者だったが、お前にとっては救世主だっただろうな、という事だ。」

それくらいお前は救いようがないってことだよ」

「……うう……」

「さつさと転生先を決める。お前みたいなクズの顔なんか長く見たくもないんだよ。さつさとどこにでも行け。」

最も、お前ならどこも似たようなものだろうがな」

神様は突き放す様に話す。

正直俺はどこにも行きたくない。行くとしたらあの世が一番だ。もう何もかもが面倒だ。

自分を変えたい。こんな自分に別れを告げたい。でも、どうやった
ら……

そこで俺は閃いた。

「転生先を決めた」

「ほう?」

「その上で一つ、頼みたい事がある。チートとかそんなのじゃない、簡単なことだ」

「……とにかく言ってみろ。内容次第だ」

~~~~~

「いつてらっしゃい。気をつけてね」

「はい」

母さんが手を振る、僕が手を振り返す。

ランドセルを背負った僕は、小学校までの通学路を歩む。

「よう」

「おはよう」

「あ、おはよう」

その途中で友人がいたので挨拶をした。

「今日の体育ってさ、プール掃除だったよね。何か楽しみだなあ」

「上級生と一緒になんだって。上級生が力仕事してくれるから僕たちは結構辛くないらしいよ」

「でも何年後かは僕らがするんだよねえ」

「教室で勉強してるより楽しいからいいけどさ」

「水着っているんだっけ？」

「いらないよ。泳がないんだから」

「よかった」。僕実は持ってきてないんだよね。家で準備してたんだ」

「おいおい、気が早くないかよ」

そんな当たり前な小学生の朝。

（これが普通の、なのか。怠けてたら僕の未来の姿はあんなのになつちやうんだなあ）

僕はうつすらそう思った。

@

少し時を遡る。

「小学生の頃に戻りたい？コナンみたいになりたいって言うのか？」

神様はそんな風に言った。俺は構わず続けた。

「その上で頼みがある。今の俺の姿を記憶として残してくれないか？」

「その真意を聞こうか」

「俺はやり直したい。まともだった頃からな。転生までできるあんなら時間の逆行くらい朝飯前だろ？」

「確かにできなくはない。面倒な設定を組み込むこともない分、楽っちゃ楽だがな。だがなぜ記憶を？」

「あんたは言ったな？俺の運命を捻じ曲げたって。今度は俺が自分の運命を捻じ曲げたいんだ。その為に今の記憶がいる。」

ガンダム00の世界で俺の事をこんなことを言った奴がいたんだ。『あいつの姿はこれ以上ないくらいの反面教師だ』ってな」

「まあ当然の事ではあるな」

「だから、俺の今の姿及びにそうなった経歴をその頃の俺に刻み込んでおきたいんだ。俺を変える為に。」

それだけだ。どうだ？」

神様は少し考える素振りを見せた。そしてこちらを向き、ふわりとほほ笑んだ。不謹慎に可愛いと思ってしまった。

「どうやら、一応学んだことはある、という事か。最も、最初に会った時の事から考えれば、だがな。」

それだけでも、チートな能力がほしいとか原作レイプしてやるとかほざいていた頃に比べれば充分な成長、かな？」

そして神様は空間を撫でる。

「要望は聞いてやろう。お前が小学生だった頃のスペックの上で、

今のお前の姿をインプットさせておく。

基本的な記憶は全て削除しておくからな。後は私は介入しないから、そこから先は頑張れよ」

そして、光が段々と広がっていき、俺の身体を全部呑み込んだ。

@

僕の頭の中に殆ど悪夢のような形で最悪の未来の姿が映っている。怠けているとこの姿になる事なので。ある意味予知夢である。

最初、僕は恐怖に震えた。そして決心を新たにした。頑張って未来を変えよう、と。

『どうだ？小さい頃に戻った気分は』

神様の声だ。てればしーって奴かな。頭に直接響く。

「ねえ。僕は本当にあんな風になるの？」

『私が証人だ。何せ実物を見たからな。……二度と見たくないがな』

「……怖いな。嫌だなあ」

『忘れるなよ。それはお前の行く未来の形の一つの実像だからな。』

後はお前の頑張りが次第だ。私はこれ以上お前に介入しない。

会話もこれっきりだ。もう二度とお前に話しかけない。後は一人で頑張るんだな』

「うん。ありがとう。神様」

『もう一度言う。忘れるなよ、己の未来の姿と、私の存在を』

そう言っただけで神様の声が消えた。もうこれから二度とこの声が聞こえることはないだろう。

僕の中で、神様への感謝の念も枯れることは絶対がない。

「おい、何ボケっとしてんだよ」

「さっさと学校行こうぜ」

「うん。待って」

僕は友人達の方に走っていった。先には小学校の校門が僕達を待っているように口を大きく開いている。

FIN

## 現実（後書き）

正直もうチヨイオリ主を酷い目に会わせるべきだったと後悔しています。

## 後書

初投稿でなんちゅう物をやったんだよ……なんて意見の方もおられますが、私自身は結構楽しかったです。

一応個人的な語りになるので、ご注意を。

こんな物を読んでいる時点でわかってくださると思いますが、私はチートオリ主転生物が反吐が出るほど大嫌いです。ハッキリ言っと、とても気持ち悪いんですよ。

その作者が明らかに自分の願望をそのまんま乗せてやりたい放題って感じじゃないですか。

例として、今回の題材として使わせて頂いた機動戦士ガンダム00なんです、

純粹種イノベーターの力を持って転生して大暴れ……とか見ると、思わずふざけるな、と思いたくなるんですよ。

何故なら、主人公の刹那・F・セイエイは過去に両親を自分の手で殺めたトラウマを持っていた挙句、信じていた神なんて

最初からいなかったことに絶望し、そんな破壊者でしかない自分を変えるべくガンダムに乗ってたくさん戦い続け、

その上でC Bのクルーやマリナ、グラハムとの出会い、ロックオンと言う戦友の死を経て未来を創るべく更に戦い続け、

その過程を経て純粹種イノベーターに覚醒したんですよ？

そこまで辿り着くのに数々の努力や苦痛があつて、ドラマもあつたはずなんですよ。

なのにそれが、いつの間にか死んで神様にチートな能力もらって俺無双、とかふざけてるのかって思ってしまうんです。

しかもそのオリ主、何の努力もしてないのにすごい能力をもらって何の葛藤もなしに暴れ回るのが気に入らないんです。

正直言つて、こういうジャンルの作品書いている人の顔とスペック

が知りたいと思ってしまいます。

現実でのお前はどうか、と。

後、原作崩壊とか原作レイプとか言う言葉は基本気に入りません。結果的になるならともかく、最初からそうするつもりで書くってどういう事なんだろうかね？

自分は趣味でこういう場に二次小説を書く、というのは否定する気は全くないです。私はそんな偉い人間でもないですし。

寧ろ、面白く読ませて貰っている以上、もっとやれ！くらいに好きなんです。

でも、使わせている原作がある以上、その原作に対して一定以上の敬意があるべきではないかと思うんです。

その原作がある事に感謝して、僭越ながら使わせて貰います、くらい言えるような精神でないといけないと思います。

……おかしいでしょうか？

それと、ここのサイトは何かとこれらのジャンルが多過ぎる気がします。

なので、今回チートオリ主転生物の露骨なアンチテーゼの作品を書かせて貰いました。

一応言っておきますが、他所の作品を叩いたりする行為は一切しません。

思った事は自分の所で誰かに迷惑をかけることないよう勝手にやらせて貰うことにしました。

因みに今回使わせてもらったオリ主にはモデルがいます。私の大学の友人の知り合いで、最近は付き合いが殆どないらしいけど、高校卒業してから大学にも行かず、就職もせず、自分の家に籠りっ放しだそうです。実体験では無いのでかなり曖昧ですけど。

一度だけ会ったことがあります……何と云うか、すごい怖かったです。こんな風になったら嫌だなあ的な。

それで、その友人がその知り合いについて論文をまとめたのも本当

です。

それを見て私が一番最初に出た言葉が「うわぁ……」でした。勿論非公開です。私達グループの秘密です。

この作品を見て『うわぁ……』と思った人は正常だと思います。『ドキッ』とした人はヤバイです。

後者の人はネット小説なんて書いたり読んだりしないで現実で自分が打ち込めることに励んだ方がいいですよ。

後、友人の論文で知った事ですが、ぼっちさんや引きこもりNEETさんは基本『無趣味』な人になるらしいですよ。

何かに打ち込んだり、自分で努力したりすることが無かった人になるらしいです。オタクさんとは別物です。

最後に

こんな駄作に（短いけど）最後まで付き合ってくれた人は神過ぎる。ありがとうございます。

多分、面白く読んでくれた人はいないだろうなあ……いたらいたですごくいいけど。

CAST

主人公                    オリ主

ヒロイン（？）            神様

その他            オリ主の両親

                  オリ主の義務教育時代の同期の友人A / B

教官

                  オリ主の転生先の同期と後輩の皆さん↑もうめんどくせえ！まとめちまえ！（お

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7334n/>

---

ガンダム00の世界に転生!

2010年10月30日02時35分発行